

年次活動報告書発刊に寄せて

熊本大学工学部では、平成12年度（2000年度）から毎年、本学部及び大学院自然科学研究科（工学系）の年次活動報告書（年報）を刊行して参りました。本年も、本学部評価情報専門委員会ならびに各学科のご尽力により、ここに第21号が完成いたしました。本報告書には、令和2年度（2020年度）における教育、国際交流など各分野における所属教員の多彩な活動の実績や、部局運営に関する組織としての取り組みを、時系列的にも比較が可能な形でまとめております。これまで工学系教員の研究業績、科研費等の外部資金獲得状況、共同研究実績、国際交流活動および社会連携活動についても本年次活動報告書に記載させて頂いておりましたが、これらにつきましては、本年度より科学技術振興機構が運用しておりますデータベース型研究者総覧“researchmap”（<https://researchmap.jp/>）での公表に統一させて頂きました。学外の方々に組織としての活動状況を的確にご理解いただき、大学運営についてご指導ご助言をいただくための情報公開が本報告書作成の目的ですが、同時に、教職員自らがその活動を客観的に振り返り、次期の活動を企画検討する際の資料として活用することも意図しております。是非とも内容をご一覧いただき、ご活用いただけましたら幸甚に存じます。

熊本大学の第三期中期目標・中期計画期間（平成28～令和3年度）における大学としての目標“～「くまもと」から世界に輝く研究拠点大学～ 「創造する森 挑戦する炎」”に沿い、教員組織である大学院先端科学研究部ならびに教育組織である工学部及び大学院自然科学教育部では、教育研究、社会貢献における活動を展開しております。教育面では、平成30年度に工学部および大学院自然科学研究科を改組し、6年一貫的教育を実施する体制に変更しました。特に従来7学科体制であった教育組織を、4学科12教育プログラムに改組しました。今回の改組では、工学部の面白さや学生自らが自分の将来を考えた上で修学に取り組むための動機付けなどを目的に、1年次に共通科目を配置しました。この中でも、「企業と社会」を新設し、企業の最前線で活躍されている卒業生などのお力をおかりして、工学部1年生にこれから熊本大学工学部で何を学ぶかを考える機会を提供しています。また、これまで工学部のものづくり教育を主に担ってきた工学部附属グローバルものづくり教育センターは平成30年度改組にともなって、新設の「工学部附属グローバル人材基礎教育センター」の事業のひとつとして位置付けられ、ものづくり教育に加え、国際連携事業などの企画立案・運営も担うようになりました。学部・学年・国の枠を越えて、協働するものづくり教育は改組後も継続して展開しておりますが、残念ながら2020年度は、新型コロナウイルス感染症パンデミックにより国際連携デザインキャンプ（International Capstone Design Camp: ICDC）は中止となりました。平成30年度にアントレプレナーマインドを育むきっかけとして新設しました「夢発掘ピッチコンテスト」は外部からの評価委員をお迎えしオンラインにて実施しており、外部団体主催のコンテストに参加し受賞する学生もでてきています。

研究面では平成25年度に選定された「文部科学省研究大学強化促進事業(RU-22)」を核に、大学院先端科学研究部（工学系）、関係の研究所・センターと連携し様々な研究を展開しております。平成30年度に採択された「先端研究基盤共用促進事業」の運営拠点として、令和元年度に大学院先端科学研究部附属イノベーション研究教育センター(i-REC)を設立し、工学部附属の工学研究機器センター、中央工場及び黒髪地区アイソトープ施設が有する研究設備・機器を共用化するシステムを導入するとともに、共用化による「組織（大学）」対「組織（企業）」の産学連携を熊本創生推進機構と連携して推進する体制を整えました。

平成28年4月の熊本地震から2年で教育研究機能はほぼ復旧し、平成30年度末には震災で大きな被害を受けた工学部1号館の改築を終え、本格的な復興に向け動きだすことができました。被災した重要文化財の工学部研究資料館も令和3年12月には修復が完了し建設当時の姿が蘇っています。これまでの実績や蓄積、さらには今回の熊本地震で学んだ多くのことを踏まえて、教育力や研究力に一層の磨きをかけ、世界水準の教育と国際的に卓越した研究の実践に努力したいと思っております。今後とも、熊本大学工学部の活動に対し、ご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月

熊本大学

工学部長・大学院自然科学教育部長

連川 貞弘